

■ GERMINATION

UCSB 留学体験記

小比賀 聡

現在、私は米国カリフォルニア州にある University of California Santa Barbara (UCSB) の Thomas C. Bruice 教授のもとで「DNA-タンパク質複合体の分子動力学解析」に従事しております。まだ、こちらにきて半年も経っておりませんので海外留学の全てについて語ることはできませんが、ここでは、私が米国での研究生活を通じて感じたことを述べてみたいと思います。

まず留学先をどのようにして決めたのか、これはこれから海外で研究してみようと考えている若手の方々にとって興味がある点ではないでしょうか。基本的には自分のやりたい研究ができる環境を選ぶ、それでいいのだと思います。私の場合も以前より興味があった分子動力学を一から学びたいということで、このラボを選びました。こちらにきて新しいことを一から始めるわけですから、それなりの苦労はありましたが、最初の2ヶ月を乗り切れば後はなんとかなるものです。もちろん、これまで自分が培ってきた経験をいかせるラボで仕事をする場合にはよりスムーズに研究をスタートできることでしょ

う。さて、実際に研究をスタートしてまず感じたのは、ここで研究している人たちは、ポスドクであれ、大学院生であれ、学部生であれ、皆一人前の研究者として振る舞っているということです。個人個人が自分の興味のあるテーマを選び、それぞれが自分の責任で仕事を進めていく。当然、その過程において教授や周りのポスドクとのディスカッションは頻繁に行なっていますが、基本的には自分の仕事には自分が責任を持つ。言い換えれば、他人からの助けを期待しては何もできないというのがこちらの研究スタイルのようです。日本にいる時は、先輩が後輩の面倒を見る、場合によっては手取り足取り指導を行なうということが当然のように感じられていたが、こちらでは（少なくともこのラボでは）そういう光景はほとんど目にしません。そのため、研究が行き詰まった時、トラブルが発生した時などでも、自分から周りの研究者へ積極的に助けを求めていかないと事態は解決しないのです。一見非常にシビアだとも感じられるこの研究スタイルは、こちらでは本当にうまく機能しているようで、力のある人たちはこの環境の中でどんどん成果をあげています。同じラボの大学院生は、日本でい

ばまだ修士2年になったばかりなのですが、すでに有名雑誌に5報論文が掲載されており（すべて彼女がFirst Author）、あと何ヶ月かで博士号を取得することになっています。

米国で研究する際に、大きな問題となるのはやはり英語力でしょう。日本人の多くは中学・高校・大学で英語の読み書きをしっかりと習っているのですが、こちらの方は何とかなるのですが、英語を聞く、あるいは話すことまで得意という人はそれほど多くはないかもしれません。実際に私も英語では苦勞しています。今でこそ研究内容のディスカッションやちょっとした雑談などにも参加できるようになりました（もちろん流暢に喋るところまではいきませんが）、こちらにきた当初は、ラボの人たちが何を話しているのかさっぱりわからないという状況でした。そんな時でも、私の周りの人たちはこちらの下手な英語をがんばって聞こうとしてくれていたようです。このころよく言われたのが、「君の英語は僕のドイツ語よりはるかにましだよ。全然大丈夫だ。」というものです。これから留学を考えておられる若手の方にも、「自分は英会話が苦手だ」と思っている方はおられるでしょうが、心配し過ぎる必要はまったくありません。しかし、英会話の能力を高めようという努力だけは続けておかれることをお勧めします。

海外で研究することのメリットとは、単に新しい研究の手法を学んだり、その分野における最新の動向をキャッチできるといったことだけではなく、むしろ世界の第一線で活躍している研究者たちの研究に対する取り組み方、ものの考え方を肌で感じるができるという点ではないでしょうか。若手の皆さんも、将来研究者としてやっていこうと考えておられるならば、海外での研究生活を経験してみたいはいかがでしょうか。きっと大きな何かが得られるのではないかと思います。

